

74歳になつた息子は、父が過ごした最期の地
マーシャル諸島をめぐる旅に出た。



大川史織 初監督作品
プロデューサー／藤岡みなみ

タリナイ

tarinæ

映画「タリナイ」

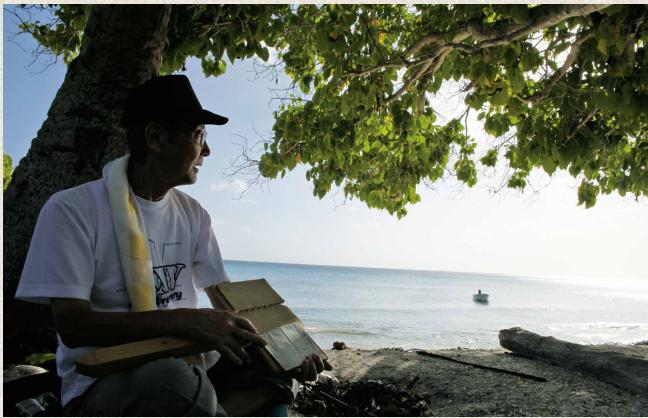
制作：春眠舎／配給：春眠舎／2018 | 日本 | カラー | デジタル | 93分

www.tarinae.com

春眠舎

MITOMO STUDIO
SHIBUYA

コイシイワアナタワ 迎えてくれたのはマーシャルの歌でした



1945年4月。

ひとりの日本兵が

戦地マーシャル諸島で命を落とした。

栄養失調による飢えであった。

亡くなる数時間前まで書かれた日記と遺言は

戦後奇跡的に生き残った戦友から

遺族のもとへ届けられた。

2016年4月。

74歳になった息子は

マーシャル在住歴のある若者3人とともに

父が過ごした最期の地をめぐる旅に出た。

今もなお戦跡とともに暮らす島のひとつと、

マーシャル語の中に残る日本語。

「タリナイ」が意味するもの。

わたしたちが忘れようとしてきた記憶が

さまざまなかかたちで問いかけてくる。

マーシャル諸島共和国

人口約5万人。そのうち約3分の2は米国本土やハワイ、グアムで暮らす。29の環礁と1,200以上の島々からなる島嶼国。日本の委任統治時代は、南洋群島のマーシャル群島と呼ばれ、アジア・太平洋戦争では約2万人の兵士がマーシャル諸島で命を落とした。

現在は世界有数のダイビングスポット。モモタロウ、カネコ、ヤマムラなど、日本にルーツをもつマーシャル人も多い。



映画『タリナイ』は、キャメラがぶれないとか
フォーカスが合っているとか技術的な問題を超えて、
フィロソフィーが映画になっています。

「最後カナ」という言葉を書いた富五郎さん。
どれくらいの時間をかけて書いたのか、
最後の「ナ」を書いたときに、
これで生涯で書くべきことはぜんぶ書いた、
伝えるべきことは全部伝えた、
あとはかたちとして、心として伝わってくれよと、
そしてこのことを二度とだれも体験しないような世界に
きっとなってくれという切実な思いが、
映画を作った大川さんや映された勉さんや、
通訳や案内の人などの背後に見えてくるという、
たいへん優れた映画ですよ。

—— 映画作家 大林宣彦

映画関連本



「マーシャル、父の戦場 —ある日本兵の日記をめぐる歴史実践—」

大川史織 編

みずき書林 / A5判並製・416頁 / 2,400円+税

楽シイ時モ 苦シイ時モ

オ前達ハ 互ヒニ 信ジ合 嬉シイ事 分チ合ヒ——

1945年、南洋のマーシャル諸島で多くの日本兵が餓死した。そのなかのひとり、佐藤富五郎が死ぬ直前まで綴った日記と遺書は、戦友の手を経て息子のもとへ渡り、73年の時を超えて解読されることになる。そこには、住み慣れない島での戦地生活、補給路が絶たれるなかでの懸命の自給自足、そして祖国で待つ家族への思いが描かれ、混乱と葛藤のなか、自身も死へと向かう約2年間が精緻に記されていた。〈70年以上前に・南洋で・餓死した〉日本人といまをつなぐ、〈想像力〉の歴史社会学。



長崎先行上映会【入場無料】

全国順次上映に先駆け、
長崎で上映会を開催します。

[日時]

2018年9月22日(日)

13:30開場 / 14:00上映

[会場]

長崎歴史文化博物館

長崎市立山1丁目1番1号

web: www.nmhc.jp/

主催:

長崎県保険医協会

上映後、大川史織監督と藤岡みなみプロデューサーのトークショーあり(予定)

映画の詳細や最新情報は、公式Webをチェック。

www.tarinae.com

映画『タリナイ』ロゴデザイン:ワトナス 小田起世和 / ポスター・デザイン:景色デザイン室 古庄悠泰